

# 佳作

遺言<sup>いげん</sup>

新垣 博也

画面の中の二人の目は、精気に満ちていた。祖父は、庭の花木の方向をまぶしそうに見つめ、祖母は、カメラのレンズごしに、私を見つめているようだった。二人の視線は交錯していたが、その先には、七十年近く前のあの光景がビビッドに広がっていることは、容易に想像できた。私が質問すると、祖父は訥々と、慎重に自分の目前で展開される出来事について話し始めた。

「戦争なんてばかなことをしたものですよ」

当時受け持っていた六年生の平和学習の一環として、祖父母の戦争体験を子どもたちに伝えたいと私は考えていた。しかし、高齢の二人が小学校を訪問して講演をすることは厳しいので、私がインタビュし、その様子をビデオに撮ることにしたのだった。授業ではこの映像を見せ、戦争のむごさや生命の尊さについて子どもたちが考えて、それなりの意見を発表することができていたように思う。

あれから七年。偶然、その記録データを見つけた。今、二人の映像が私にとって意味があると感じているのは、きっと、二人がもうこの世にはいないという事実からであろう。

私が最後に見た祖父の姿は、痛々しいものだった。肺炎で呼吸が浅くなっており、酸素を吸入しなければ、ゼーゼーして声も出ない。それでも、

この時の祖父は、しきりに吸入マスクをはずしては、私に何かを伝えようと口を動かしていた。「何か言いたいことがあるのは分かるけど、苦しくなるからやめて」と言っても、目だけはしっかりと私を見つめ、体を起こし、ヒューヒューと私に訴えかけた。その微かだが意思の込められた吐息をあざ笑うかのように、病室には、何かの機械の音が、無機質にやかましく鳴り響いていた。

伝えたいことがあるのに、それを伝える術を失うことは、人間にとつてそれこそ致命的なことではないか。あの時、祖父は息ができない苦しきよりも、孫に自分の気持ちも伝えきれないことに、耐え難い苦しみを感じていたのではないか。そんな彼を少しでも慰めることが、私にできたのだろうか。

祖父がいなくなってから、祖母はますます心身が衰弱していったよう

に思う。ホームで暮らしながら年月が過ぎていく中、私は結婚し、息子もできた。そして、ことあるごとに、息子つまりひ孫の顔を見せに行った。

しかし、彼が自分のひ孫に当たるといふことの重大さ、あるいは意味のようなものを、祖母はもう理解することができていなかったと思う。もちろん、赤ちゃんかわいいね、知らんちゅうだね、と言つて時折笑顔を見せるのだが、なぜか自分から彼に触れようとはしなかった。名前を呼ぶこともなかった。

ひ孫をあやしてもらふことが祖母孝行だと信じていた私は、しびれを切らし、祖母のベッドに腰かけ、彼女の手を取り、赤ん坊の足を触らせた。その一瞬、祖母の目に、精気が宿つたように見えたが、びっくりした息子が泣くと、また何事もなかったかのようになり、そばにいた私の母を見て、食事の時間はそろそろだねと食堂に行く催促をしたのだった。

祖母が集中治療室に入院したとき、一人で訪ねた。口やのど、腕に入れた何本もの管を抜かないように、祖母の手にはミトンがはめられていた。祖母は私を見るなり、手を合わせて「お願い、これをとって」と目を向けてきた。私が、「ごめんね、今はとれないんだよ」と何度もなだめると、今まで見たことのない剣幕で、私の腕を力の限り叩いた。いたたまれなくなった私は、五分足らずで病室を出た。数日後、祖母は亡くなった。

祖母もまた、祖父と同じように、私に伝えたいことがあったのかもしれない。そう考えると、知らずに涙が頬を伝っていた。

「私が生きている間はね、こうやって、あんたがたにね、教えてあげますよ」画面の中の祖父が言う。

「今後は、戦争のない世の中を切に願っております」画面の中の祖母が言

う。

映像の終わり、二人はじっとカメラを見つめる。その視線と私の視線がパチリと合う。祖父母が、私を見ている。そう、彼らはこうして、今でも私たちを見続けているのだ。そして、これからもずっと。

※

二人の慈愛にあふれたまなざし。それが、私にとっての、彼らからの遺言となった。

暗くなった画面に、私が映る。私は、私を見つめる。背後で、「おとたん」と声がする。私は息子を抱き上げ、名前を呼んだ。

【文中の※印箇所について】

著作権の都合により、引用部分を非掲載としております。

本文全編をお読みにになりたい方は、おきなわ文学賞事務局までお問い合わせ下さい。

電話・098-9987-0926

メール：info@okinawa-bungaku.com